資 料

開発・生産部門シンポジウム

「油・ガス田開発のリスク評価」

SYMPOSIUM

Risk evaluation in development of oil and gas fields

開 会 の 挨拶*

世話人**代表 佐野 正治***

Opening address by Masaharu Sano

皆様、おはようございます。私は石油技術協会の生産技術委員長を務めております佐野でございます。今年度春季講演会の開発・生産部門シンポジウムを開催するに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

本日は雨の中を多数ご参加いただき、ありがとうございます。今日は十分皆様にリスク評価をしていただき、俗に言うリスクに見合うリターンをここで得て帰っていただければと思っております。今回、開発生産部門のシンポジウムに「油・ガス田開発のリスク評価」というテーマを選んだわけですが、会の始めに当たりましてこの背景をご説明させていただきます。

これまで石油技術協会は、技術という名がついているとおり、開発生産部門ですと、地下の油層のことや坑井の掘削・仕上げ、あるいは生産設備といった技術的な論議や事例の紹介、共有というようなテーマで代々シンポジウムが行われてきました。そういう分野での技術革

新、例えば油層シミュレーション、水平坑井あるいは坑井刺激など、いろいろな要素について深く論議するというような傾向でありましたが、一方では最近各分野の細分化あるいは専門化が進んでおり、それらを横断的につないでいろいろな分野の方のお話をうかがう、マルチ・ディシプリナリというものをやってみようではないかという声も強く出てきています。生産技術委員会の中だけを取りますと、そういう意図を受けつつ今年の春から埋蔵量・資源量に関する分科会、また、ガスの取り扱いというようなことでのガス攻法分科会、の2つを立ち上げてきております。さらに各委員会で共同して提案されたワークショップも明日開かれることになっております。

そこで、今回のここでのシンポジウムのテーマもその一環として、少し大上段というところではありますが、横断的なこのテーマを選んだ次第です。リスクというと「リスクを取る」とか「リスクの回避」、「リスクの分散」などと一般的な名詞として言葉自体はよく聞かれます。では、リスクとは本当は何を意味するのかということで辞書を引いてみますと、例えば広辞苑などでは「危険」、「非保険物」としか書いてありません。このような非常にリスクを取らない表現しか出ていないのですが、われわれが主にやっております石油の上流部門というのは、まさにリスクそのものだというように思います。そこで、今回こういう場で、取るべきリスクとはどんなものなのか、あるいは技術の進歩でどのようなリスクの最小化ができていいのか、といったことについて、技術的な

* 平成13年5月31日、平成13年度石油技術協会春季講演会開発・生産部門シンポジウム「油・ガス田開発のリスク評価」での挨拶 Opening address at the 2001 JAPT Development and Production Technology Symposium entitled "Risk evaluation in development of oil and gas fields" held in Makuhari, Chiba, Japan, May 31, 2001.

** 世話人：矢澤仁徳（公団技術センター）、吉良仁秀（日石開発）、難波隆夫（公団本部）、鈴木孝一（ジャパン石開）、影山隆（石資本社）、藤原勝憲（ジャパンエナジー石開）、加賀野井彰一（帝石技研）

*** 生産技術委員会委員長、帝国石油㈱

面のみならず経済的な面での論議もできればと思っております。

石油・ガスのビジネスというと、これは地球46億年の歴史の賜物であり、それから貴重なる資源を地上に出すというまさに理系、文系というか、理学、工学、あるいは経済学、心理学というようなものまでを網羅するような世界だと思います。そのあたりが冒頭申しました若干大上段のテーマというところなのですが、このテーマを一日で語りきるというようなことはなかなか難しいでしょう。とはいえ、本日で講演いただく皆様のお話、それからこの会の最後にあるパネルディスカッションを通

じて、ご参集いただいた皆様が何らかのテーマに関して刺激あるいは知識を得てお帰りいただければと思います。ぜひ、活発な論議をお願い致します。

最後になりますが、今回、このシンポジウムは作井技術委員会との協調として、横断的な試みの第一歩として作井技術委員会から講演及びパネルに参加いただいております。また、資源経済委員会からも参加をお願いしております。この場を借りて感謝申し上げたいと思います。それでは今日一日、皆様、よろしくお願い致します。